

サー・フィリップ・シドニー　アルカディア（二）

平川泰司訳

第五章

息子のクリトポンを思つてのカランデルの悲しみ。アルガロスとパルテナアの物語。彼等の完璧さ、愛、不幸。彼女が毒で顔を潰されること。彼の稀にみる誠実さ。彼女の不思議な拒絶。彼等の真情の吐露。彼女の逃亡。その頃ラケダイモンの反乱奴隷の首領で、この非道な仕打ちの張本人、恋敵のデマゴラスに対する彼の復讐。彼が反乱奴隷達に捕らえられること。さらに彼を助けようとしたクリトポンも。だが、新しい首領は二人を生かしておくこと。

だが、夕食の席に着くと、カランデルの召使の一人が何事かを彼の耳に囁いた。すると彼は顔色を変えて自分の部屋に引き下がり、パツラディオスを万事粗相のないようにおもてなしお世話をするように、また、直ちに片付けなければならぬ差し迫った用向きができたので少し失礼させていただと伝えるように家の者に命じた。彼等はいわれた通りにして、数日は何とか変わった様子は見せないようにした。しかし、彼等

は巧妙に顔付きを取り繕ったのだが、パツラデイオスは何か心配なことが起こったのだと感付いた。それで、またまた夕食の席に一人で着かされたとき執事に声を掛け、主の様子がなぜこのように突然変わってしまったのかその訳を話してほしいと頼んだ。執事はしばらく言い訳にもならない言い訳をしていたが、とうとう本当のことを打ち明けた。この家の主は先頃ある報せを受け取られたのだが、それによると、間近に迫った婚礼の日を前にして、ご令息がラケダイモンの市民達と奴隷達との争いに巻き込まれてしまわれた、奴隷達が勝利を収め、ご令息は捕虜となった友人を救出しようとなさってご自分も捕らえられてしまわれた、ご令息はお気の毒に多額の身の代金を約束なさった、だが百姓達がすべての市民達に抱いている憎悪は大変なもので、いつ何時惨殺されるか分からない、これまで殺されずにおられたのは、ただ首領が一生懸命にご令息のために取り成してくれているからだ、この男は他の連中よりも人間らしい憐れみの心を持っているようだ、とのことである。その報せにご老人は大変な悲しみに打ちのめされて、どれほどの大量の涙もその悲しみの十分な証人とはなりえないかのごとくで、一人引き籠もって髭や髪の毛を掻きむしり、墓にご老人の耳を塞がせて、そのような報せを聞かなくてもよいようにしてくれなかつたことで、老齢を呪っていらつしやる。しかし、忠実な配下の者達にご老人の名ですべての友人方やご家来衆それに田畑家屋敷を借りている人達に手紙で知らせたので、今国境にはそういった方々が大勢集まっておられる。宰相のピラナックス様は個人的な問題だとして直接関与することはお断りになったが、ラケダイモンの町に損害を与えないという条件で、この方々ができる限りのことをしてご令息の救出につとめることはお許しになった。この方々はいかなる方法であれ必ずや身命を賭してクリトポン様を取り戻されるかあるいは復讐をなさるであろう。「ところでお客様。」執事はいった。「ご主人様は持ち前のご気性で、大きな悲しみをお持ちになって生きているこ

と自体が悲しみであり、考える力すら悲痛な思いによつて曇つてしまふようなときですら、長年敬虔に守つてこられた歓待の掟に忠実に事を運ばれ、お屋敷にご逗留のお客様が、いかなる意味においてであれ、ご主人様のお苦しみには感染するなどということのないように気をお配りになります。特にあなた様にはその程なのです。」しかしパツラディオスは、執事の話をつつと辛抱強く最後まで聞いていたことはほとんどできなかった。彼の心は、この出来事への同情、カランデルの見上げた振舞いように対する好感、自分に敬意を払つてくれているがゆえの敬愛、何か有効な策を見付けたいという願い、さらに親友のダイパントスの面影も加わつて、それやこれやで千々に乱れていたからである。友も同じような或いはもっとひどい不幸に見舞われていると彼は思った。そこで食卓から立ち上がると、彼は執事にこの争いの原因とその成り行きを事細かに話してくれるように頼んだ。色々な事情が分かれば何か救助の道も開けるかもしれないと思つたからである。執事は快くその願ひにこのように応じてくれた。

「お客様。」彼はいった。「私達の慈しみ深い王のバシリオス様が、予期した以上の好結果を収められて、相当なご老体であつたにもかかわらず、若くてお美しい姫君ギユネキア様をお娶りになつたとき、王妃様の従兄に当たられるお若い方が一緒にお見えになりました。アルガロス様(2)とおっしゃいますが、ひとつには、その気高い身内のご婦人に対する愛情と敬愛のゆえに、もうひとつには、その良さを自分が知らないものもいつも良いものだと思ふ若者らしい気紛れゆえに、こちらに参られたのです。そして当地の宮廷で大層知識を増されましたので、数年も経ちますと、どのような起居振舞や行いにもこの上ない有徳の心を示されました。それでアルカディアの者達はそれほどの若木が当地に移し植えられたことをとても喜んだのです。実際

一点の非の打ち所もない完全無欠の貴紳で学問にも秀でておられるのに、思い上がったところなどこれっぽちもなく、優しく気さくで、徒党を組むようなことはなさいません。それに勇猛果敢なことといったら、この方ほどの天晴な手柄を立てた武者はこの世にはいないと私は思っております。近頃テッサリアとマケドニアの二人の王子の名声が飛び交い、久しくこの国の高貴な若殿アンピアロス様の影を薄くしておりますが、それでもです。実を申しますと、アルガロス様に太刀打ちできる者がいるとすれば、それはこの方を措いて他にはないと当地では考えられているのですが、心の勇猛さにおいても肉体の能力においても、仮にアルガロス様に匹敵するにしても、勝る者は一人としていないと私は思っております。それでいて、それ程にも勇猛でありながら、人に危害を加えるようなことはなされたことがありません。起居振舞がいつも謹厳だという者もおりましょう。確かに落ち着いておられます。幾分物思いに耽られる傾向がありますが、礼を失するなどということは決してありません。言葉は常に思考によって導かれ、実行が伴います。物惜しみはなさいませんが、大盤振舞という程ではありません。この後の方も例がないわけではなく、先の方については、いつもいかにも成程という方々が恩恵を受けておられますが。要するに、私のみならずこの国のあらゆる人達の心からの敬愛の的であるこの方への賛辞なら、私はいとまたやすく一息に大盃を飲み干すだろうと自認しておりますが、アルガロス様は最も気難しい目ですら一点の染みも見出せないような方でしたし、今でもそうだと思っております。もつとも、未だ一点の染みもない、あまりにも激しいひたむきな愛を無理に捻じ曲げて解釈し、染みと数えるなら話は別ですが。そしてその愛がこれからお話ししますようにこの方に作用して、この方とこの方の愛のどちらもの評判が国中に轟きわたったのです。私の主人のご令息のクリトポン様は——この方が囚われの身となられたことがこのようなお話をする理由なのですが、しかしそのことがまた

私がアルガロス様のことと話を始める理由でもあるのです。囚われの身となられたのはアルガロス様が原因なので、そのクリトポン様は、王様のお妹様のご令息という高い家柄のお生れであると同時に、本当に申し分のない性質をお持ちの貴公子で、善を理解し愛することのできるお方なのですが、他の誰よりもこの秀でたアルガロス様との交際をお求めになりました。それで、仮に友情といえるほどのものはなかったにしても——これは滅多にお目に掛かれるような代物ではなく、實在のものか単なる言葉に過ぎないのか、疑わしいからですが——少なくとも、これからお話しするような結果を生み出すほどの、好意や親密さはありました。二年ほど前のことですが、クリトポン様がアルガロス様をさる貴婦人のところへ、私の主人のお妹様なのですが、お連れになったことがありました。この方にはパルテニア様とおっしゃる一人娘のお嬢様がおいでなのですが、それはそれは美しい方で、コリントスの女王のヘレン様か、アルカディアの較べるもののないあのお二人のご姉妹かでもなければ、どなたかをより美しいなどは、名声も決して申しませまい。そして、その美しさをはるかに一層より美しくしているのが、それが叡知に満ち溢れたこの上なく美しい心の美しい使節に過ぎないということだったのです。そしてその叡知も、自らをひけらかすよりも自らを裁くことにより大きな喜びを見出すといった類いのものでした。お話し振りは清らかで徳に溢れ、沈黙しておられても不機嫌そうではありませんし、お淑やかですが気取りはなく、恥ずかしそうにしておられても無知という訳ではありません。要するに、十分に褒めようと思えば、抜きん出ているということはどういうことなのかを、先ずしっかりと決めて掛からねばならない、そういうお方なのです。抜きん出た方なのですから。

このような完璧さ同士が出会えば、必ずやお互いを見出し、見出したものに喜びを覚えなければならぬ

いだろう、とお思いだと思います。起居振舞が似通っていることで、憎からず思う気持ち好意を引き出すのはよくあることで、道理にかなっていませんし、人の為すことは常に必ず道理に背いているというものでもありません。つまり、実際にそうなったのです。お二人は相思相愛の仲とられました。もっとも最初のうちは、希望の翼は切り取られていて、恋の炎は絶望のふいごで吹き煽られたのですが。その訳はこうなのです。

相当以前からこのご婦人にはある求婚者がおられまして、さる立派なお家柄の方なのですが、その後もずっと求婚を続けておられました。ラコニアの方なのですが、パルテニア様のお母様のすぐ近くにお住まいで、デマゴラス様とおっしゃいます。強力な富と力をお持ちで、それを誇りにし、頑固に高慢で、自分以外の誰をも愛さず、自分の楽しみのためにパルテニア様をお求めになった、とまあそういったお方なのです。欲望を満足させようと必死になりましたが、あらゆる欠点に財産が金めつきを被せたという訳です。それでご母堂様は、お兄様の私の主人のご意向に逆らって、承諾をお与えになりました。そして美しいお嬢様に母親の権威で迫って、承知をおさせになったのです。お嬢様は、ご自分の選択がお気に召したからではなく、従順なお心がまだ選択するということをご存じなかったから従われたのですが。婚約の日が近付きました。クリトポン若様がこの高貴なアルガロス様を連れて行かれたのは、その時だったのです。おそらく真意は、パルテニア様などという世にも稀なもの——すべての判断力のある目はそう判断するでしょう——をお見せになろうということだったのでしょうけれども。

しかし、約束の婚約の日まで後僅かしかなかったのですが、愛は、短時間のうちに長い旅をしなければならぬことを見て取ると、急ぎに急ぎましたので、約束の言葉がまだお嬢様をデマゴラス様に縛り付けてし

まわないうちに、お嬢様の心はアルガロス様に愛を誓われ、アルガロス様もそれをありがたくやさしく受け入れられましたので、お二人は相思相愛の仲とられました。それで、バルテニア様が何にもましてアルガロス様と結ばれることを望まれたとすれば、アルガロス様もバルテニア様を失うことほど恐れられたことはありませんでした。このようにしてバルテニア様は、好くことと好かないこと、愛することと憎悪することをお知りになったのです。そして恋に物事を判断する権威をお与えになりましたので、その日が来て、デマゴラス様がバルテニア様という贈り物を貰えるものと傲慢な喜びに溢れておられたとき、バルテニア様は断固とした拒絶の言葉でもって、拒絶しなければならぬことを申し訳なく思っていることを涙でお示しにはなりましたが、ご母堂様に、デマゴラス様に添い寝するぐらいなら、お墓に寝るほうがまだいい、と断言なさったのです。この変わりようは、ご母堂様には不思議というよりは不愉快でした。それで決意も堅く、と申しますのは立派なお家柄のご婦人に対して強情にといふのは憚られるからなのですが、お嬢様をデマゴラス様にめあわせようと、策に富み情に欠ける母親が用いうるあらゆる手段を、謙虚なお嬢様に対して試みられました。お嬢様に抵抗する力を与えたのは唯一愛のみでした。しかし、攻撃すればするほどご母堂様はバルテニア様に一層防御をお教えになり、防御すればするほどバルテニア様はご母堂様に一層執拗に攻撃をおさせになりました。ご母堂様はどうとう、アルガロス様が間に割り込んでお嬢様の愛情に蝕を起こさせ、デマゴラス様から光を奪ったのだということをお知りになって、アルガロス様を移動させ取り除こうとあらゆる手立てを尽くされました。アルガロス様がお嬢様の不動の求婚者であることをお示しになったのでなおさらでした。そしてまず、意地の悪い継母のジュノーが名高いヘラクレスに命じたのと同じ程の沢山の危険な冒険を、アルガロス様におさせになりました。しかし、アルガロス様の徳が試されれば試されるほど汚

れの無いものになってゆく一方で、アルガロス様を倒そうとご母堂様がなさるあらゆることは、アルガロス様を高い名誉の地位に引き上げました。それはご母堂様の心をアルガロス様のようなあらゆる面で卓越した方の方へと動かすに十分なものだったでしょう。ですがご母堂様は、自分の思い通りにして、お嬢様をデマグラス様に嫁がせることで自分の権威を示そうと、あらゆる物の道理に逆らっていらっしやいましたので、アルガロス様が徳を示されれば示されるほど一層アルガロス様をお憎みになり、アルガロス様が征服をなさいますとご自分が征服されたようにお考えになり、なおも一層危険な冒険をおさせになったのです。そして美しいお嬢様には考え得る限りのあらゆる冷酷な仕打ちをして、お嬢様があきらめて指図に従うよう仕向けられました。しかし、アルガロス様は為すことで、そしてパルテナ様は忍ぶことで、どちらがより大きな変わらぬ愛を示されたか、とても判断できることはありませんでした。と申しますのも、アルガロス様にあつては、冒険をやり通す勇気が無くなるより先に冒険そのものが無くなってしまったでしょうし、同様にパルテナ様にあつては、変わらぬ忍耐より先に悪意の方が消滅してしまつたでしょうから。とうとうデマグラス様とご母堂様は、裏切りによってアルガロス様を亡き者にしようとなさいましたが、アルガロス様は先見の明と勇気によってすべてを乗り切られましたので、ご母堂様は憎悪と悲嘆に心臓が裂け、お亡くなりになりました。

しかしデマグラス様は、パルテナ様は自由の身となられたからには決して自分の自由にはなるまいと確信され、パルテナ様ご自身からも同じ趣旨のきっぱりとした返答を受け取られると、鋭い目付きで観察してアルガロス様がまさに願望の成就を味わおうとされていることを見て取って、ご自分の仕合わせを望むよりアルガロス様に嫉妬されたのです。それでこの邪悪な悪党は、撥ね付けられた愛と妬み深いプライドが生

み出し得る限りの陰險な悪巧みで思いを固め、パルテニア様が心から喜んで同意なさった婚礼に華を添えようと、アルガロス様が主立った幾人かのご友人を呼びに国へ戻られたまさにその時を狙って、もう一度申しますがこの邪悪なデマゴラス様は、ちよつと話したいことがあるといって、情容赦もなく力づくで、パルテニア様の顔一面に世にも恐ろしい毒を擦り付けたのです。女のか弱い腕では抵抗しても無駄でした。その毒の効き目たるや癩病病みですらこれほどの崩れた顔はないといった程のものでした。そしてそれをし終えるとデマゴラス様は、待たせてあつた供の者や馬もろとも、パルテニア様のご家来衆を蹴散らして立ち去られました。思いもかけぬ非道な振舞いに、この方々も力の及ぶ限り復讐をしようとはなさつたのですが。しかしこの極悪非道の行為はカランデル様のお耳にも入り、ご主人様は、王様とご自身の両方の仲介によって、ラケダイモンの王様と元老院がデマゴラス様の国外追放を宣告し、もし国内で見付かれば死刑、という風に事を運ばれました。デマゴラス様は罪を憎むべきところを罰を憎み、集め得る限りの軍勢を引き連れて、先頃国に対して謀反を起こしたヘロットどもに加わられました。奴等はいかほどの身分の方が仲間に加わられたことを喜んで、デマゴラス様を首領に戴き、氣違い染みた復讐心に逸る下司のうぞうむぞうが思い付く、ありとあらゆる残虐この上ない乱暴狼籍を働いています。

しかし、パルテニア様にこのおいたわしい仕打ちがなされてからしばらくすると、アルガロス様はお氣の毒に、パルテニア様のお美しい姿を心に思い描き、既に目に至福の極致を約束しながら戻って来られました。そしてその時その目が、他の誰もその事をアルガロス様に申し上げる勇氣など持っておりませんでしたので、自分の不幸を自分に告げる最初の使者になつたという訳なのです。アルガロス様にパルテニア様がお分かりになつたときのお二人のお嘆きようをお話しして、ことさらにあなた様の憐愍の情を掻き立てようとは思つ

ておりませんが、私が今『お分かりになったとき』と申しましたのは、最初はお分かりにならなかつたからですし、最初はお分かりになつても、それ程の宝石を失つたことを心弱くも嘆き悲しむのを押さえられるほどの強い心が、即刻助けに駆け付けた訳でもなかつたからなのです。その方面に通じた方々がこれは回復不可能だとおっしゃつたので、なおさらのことでした。しかししばらくすると、パルテニア様が示された変わらぬ愛とこの上なく汚らしい靄を通して輝く内なる高貴さを見て取つて、記憶のうちにまだ最初の面影を持ち続けていた愛の誠と有徳の誠実さそれとに誠実であることの喜びが、高潔なアルガロス様を完全に占領しましたので、英知に満ちた話振りが逆境に与え得る励ましのみならず、目を奪われた恋する男が表し得るありとあらゆる数限りない優しさによつても、アルガロス様は、筆舌に尽くし難い悲しみをパルテニア様から追ひ払う一方、婚礼の式を急ごうとなされたのです。アルガロス様は、自然が惜しみなく与えた立派な財産をパルテニア様が召し上げられておしまいになつたというようなことがまるでなかつたかのように、誠心誠意明るく熱心に事を運ばれました。そしてそのため、デマゴラス様に対してなさるお積もりの復讐も、後回しになさいました。いつもパルテニア様のお傍にいて、これまでも増して、何くれとなく甲斐甲斐しくお世話し楽しそうにして、パルテニア様を喜ばせようと思われたからなのです。

ですが、アルガロス様以外のどなたからも期待できないような、この類い稀な模範をアルガロス様がお示しになる一方で、パルテニア様の愛の方も、同様に不思議な道筋を辿りました。と申しますのも、パルテニア様はご自分の命以上にアルガロス様と添い遂げる事をお望みでしたのに、ご自分の望みもアルガロス様の望みもうちやちやして、どうしても結婚を承知なさらなかつたのです。それは愛する気持ちと愛するがゆえの気持ちとの世にも不思議な合戦でした。アルガロス様は匹敵するものない美しさから生まれた愛ゆえに、

身の毛がよだつほどの醜さを喜ばれ、パルテニア様はアルガロス様を夫としたいという身を焦がす望みゆえに、真心からアルガロス様を決して夫とすまいという堅い決意を打ち立てられたのですから。実のところ、パルテニア様は心中アルガロス様を深く愛していらっしやいましたので、アルガロス様にふさわしくないものにアルガロス様が結び付けられることなど、心中お考えになれなかつたのです。

実際、お客様、アルガロス様の悲嘆に暮れた、真に愛情の籠もった言葉の数々を繰り返しさえすれば、とりわけ秀でた弁舌家ですら、雄弁をひけらかす格好の場が得られることでしょう。アルガロス様はパルテニア様に、パルテニア様ご自身の愛のことを訴えられ、ご自分の愛を誠心誠意誓われて、自分はあなたの顔だけでなく心も失ったのだと考えて私が惨めな気持ちになるようなことはして下さいますな、と懇願され、あなたのお顔はこの上なく美しくはありますが、執事として私の心にあなたへの愛を滞在させるよう取り計らってくれただけなのです、そしてその愛は今や大変居心地好く落ち着いていますので、もう外部のどんな宿泊系の世話も必要ではないのです、とおっしゃいました。そして涙ながらに、私の愛は肌より先には進まないほど上辺だけのものではないことを知っていただきとうございます、その肌はあなたのものであるのですから今でも私にはこの上なく美しいのです、ひとえに私ゆえにあなたが蒙られたことのために私があなたを愛さなくなるなどという恩知らずなことがどうしてできましようか、私に対するあなたの愛の愛情の深さを見ないであなたのお顔を見たことは一度もありません、と言い切られ、あなたを楽しむことができなければ私は私の命を楽しむことは決してできないでしょう、あなたゆえにこそ私は命があることがうれいのですから、と断言なさつたのです。ですが、お二人の話を立ち聞きしていた者から聞いたのですが、パルテニア様はアルガロス様の手をぎゅうっと握り締めて、こうお答えになつただけなのです。『アルガロス様、』パルテニア

様はおっしゃいました。『わたくしがあなた様を愛しておりますことは、神様をご存じでございます。仮にわたくしが全世界を支配する女王であり、世界がもたらすあらゆる富を手にしたしておりますも、わたくしは、わたくしとそれらの富とをあなた様の足元に投げ出すことに、いささかも躊躇することはございません。わたくしは、わたくしが今でも以前のわたくしでありさえしますれば、まことにふつつか者で、到底あなた様にふさわしい女でないことは認めねばなりません。それでも、考えも及ばないような大きな喜びを胸に、わたくしをあなた様のものとしてやるといふことがたいお言葉をお受けして、誠心誠意心を込めてお仕えることで、数多の欠点の埋め合せをしたことでもございましょう。ですが、わたくしがアルガロス様をそのようなパルテニアにめあわせるぐらいなら、わたくしは今よりもっとと惨めになったほうがよろこびます。どうぞお仕合わせにお暮らし下さいませ。愛しいアルガロス様。完全な自由を差し上げます。お願いですからお受け取り下さいませ。誓って申しますが、わたくしがどうなりましようとも、あなた様があなた様の名譽とご満足にふさわしいご結婚をなさったならば、わたくしは嬉しく思いますことでしょう。』そうおっしゃるとパルテニア様は、もうそれ以上はご自分の運命を咎めないでおくことはおできにならず、いつそ死んでしまいたいと、わっと泣き崩れておしまいになったのです。

しかし、アルガロス様は深い悲しみに沈みながらも、なおも望みを遂げようと努力しておられたのですが、パルテニア様はもうそれ以上の懇願は回避し、あらゆる交際を避けようと心に決めておられ、実のところ、アルガロス様とのお付き合いですら辛くなっておられたのですが、とうとうある晩姿をくらましておしまいになりました。どちらへ行かれたのか今以て分かりませんが、どうなっておられるかすら不明なのです。

アルガロス様は長い間ありとあらゆる所を探されましたが、とうとうパルテニア様を見付けることには絶

望され、絶望すればするほどお腹立ちの程はものすごく、生きているのも疎ましくなられたのですが、先ずはデマゴラス様に復讐してからと固く心に誓われて、ヘロットどもが占領している一番大きな町に、単身変装して乗り込まれたのです。そこで多くの兵隊達に回りを護衛されたデマゴラス様の面前にお出ましになりますと、アルガロス様は最早もつと都合な時まで怒りを押さえておくことがおできにならず、助太刀の数多の軍勢もものかわ、デマゴラス様に打って掛かれ、いくつもの致命傷をお与えになりました。そしてご自身間違ひなくすぐにその場で殺されてしまわれたことでしょうか、デマゴラス様が生かしておけとおっしゃったのです。おそらくは、なにか残酷な処刑の仕方をして、目を楽しませようとお考えだったのでしようけれども。しかしデマゴラス様の思っておられたよりも早く死がやってきました。ですが後継者を指名するだけの余裕はありましたので、その少し前にラケダイモンの王様の牢獄から救い出された若者を指名なされたのです。救出されていなければ、王様の甥を殺害したかどで死刑になっていたことでしょうか。その時その男はラケダイモンの人達のところを荒らしに出掛けていて留守だったので、ヘロットどもはその若者が大変気に入っていたし、とりわけ連中の中には他の者達が服従するような男は誰もいなかったのです、この男が戻ってくると、連中はデマゴラス様の指名に従うことに同意したのです。そしてそれは連中にとってまことに幸いなことでした。この男はそれ以来最も世間知らずの若造の高望みにも勝ることを次々とやってのけたのですから。私がこの男のことをわざわざお話ししますのは、この戦争が終わったあと、公開の場で最も残酷な拷問を加えて処刑するという口実のもとに、アルガロス様をこれまでのところ生かしておいてくれているからなのです。そして連中はこの戦争は間もなく上首尾に決着が付くだろうと思っっています。

そしてこの男はこれまでのところクリトポン若様も生かしておいてくれています。若様はお友達を救

い出すために、ラコニアの幾人かの他の貴族の方々がこの方々がお集めになった軍勢共々、この新しい若い後継ぎを包囲しに行かれました。しかし、この男が飛び出してきてラコニアの軍勢を打ち破り、たくさんの貴族の方々を殺し、クリトポン様を捕虜にしましたので、皆仰天いたしました。この男は若様をやつこのことで生かしておいてくれます。何しろヘロットなどというのは残虐この上ない悪辣な連中なので、これまでもこの男は、或る時は調子を合わせ或る時は逆らつて、奴等をうまくなだめすかしていますので、これまでのところお二方の命を救っております。ですがお二方の状況は違つておりました、アルガロス様は堅固な牢に嚴重に入れられておいでですが、クリトポン様は少し自由にしておられます。本当のことを申しますと、お二方がヘロットどもに囚われていらつしやる以上、お二方がご無事でおられる望みは無いに等しいのですが、私のご主人様のご令息が囚われの身となられたこととその原因については、これで私の存じていることはすっかりお話し申し上げました。その原因そのものは、クリトポン様のことをお話しするには、そんなに事細かに申し上げる必要もなかったのですが、あまりに不思議な出来事ですので、あなた様にも面白くないこともなからうと思いました次第です。」

第六章

カラन्दルのヘロットへの遠征。彼等の有様。彼等に対するパツラディオスの作戦。その成功。ヘロットの反撃、敗走、新しい首領が戻つてきての彼等の盛り返し。ダイパントスとパツラディオスの一騎討ちと二人がお互いを認めること。二人による和平の成立とカラन्दルとクリトポンの釈放。

パツラディオスは執事に心から感謝の言葉を述べた。アルガロスのような世界中に名の知れ渡った騎士のこのように不思議な出来事の話聞いて、彼は感動し嬉しく思った。パツラディオスはアルガロスに一度会いたいものと長い間意願していた。名声が彼と競い合いたいという気持ちをパツラディオスに注ぎ込んでいたのだ。

しかしパツラディオスは色々と考えた末甲冑を持ってこさせ、馬と案内役を用意してほしいと頼み、頭部を除いてすっかり武具に身を固めてカランデルのところへ赴いた。行ってみるとカランデルは床に倒れ伏していて、哀悼の情の敵として睡眠と食物の両者をずっと追放したままであったが、息子を失ったと思うのも理にかなったことであると極度の悲しみが彼を説き付けていた。しかしパツラディオスは彼を助け起こしてこういった。「もうおやめ下さい。こんなことはもうおやめ下さい、カランデル殿。損失を嘆く前に見付け出そうと務めようではありませんか。ご存じのように私も一人失っております。この男は私の息子ではありませんが、この男が死ねば私は命を恵まれても嬉しくもなんともないでしょう。ですが望みが残っている間は弱々しい悲しみに望みの力を萎えさせてはなりません。勇気をお出し下さい。そうすればきつといい結果が後に続くでしょう。」この言葉を聞くと、彼の目の中でぱつと勇気が燃え上がったように思われ、彼の顔と身振りには勝ち誇りが描き出された。たちまちカランデルは元氣を取り戻して意氣盛んとなり、少し食事をししばらく休むと、鎧兜を身に纏い、送り出さないうで残しておいた少数の家来達にも武装させ、自ら案内役を買って出てダイパントスを国境まで導いた。そこには既に三千から四千の武士達が集まっていて、カランデルのためならどんな危険をもものもしない覚悟ができていた。しかし長く続いた平和のおかげで無能になってしまったものにありがちなように、事をなす決意はあってもどのようにしてなすかには疎く、体は

なまっついていて甲冑ばかりぴかぴか輝き、勇氣があるといつても、それは彼等が知らない敵に対する軽蔑から生じたもので、彼等自身が知っている何かに対する自信からのものではなかった。行軍にも野営にも練達の武器の操作も熟練の技能も示されなかった。パツラディオスはそれを素早く見て取ると、話してもらえう限りヘロットの有様を教えてほしいと頼んだ。

ラコニアの事情に通じた男が彼に次のような話をした。ヘロットというのはひとつの種族で、昔は土地を所有する自由民だったのだが、ラケダイモン人達に征服され、朝貢ばかりか隷属までも強いられた。彼等は長い間それに耐えてきたが、最近になってラケダイモン人達が貪欲ゆえに耐えられないほどの重税を課し、軽蔑ゆえに耐えさせるにはどうすればよいかを考えもしなくなってきたので、皆の一致した意見で——事の起こりが皆に及ぶ事柄であったからそうだったので、何者かが人為的に煽り立てた訳ではないのだが——彼等は武器を取り、勇氣を復讐で研ぎ、決意を絶望に据え付けて、思いもかけない上首尾に勝ち進んだ。彼等は既に色々の町や城を攻め落とし、多くの地主を殺害しているが、女であろうが年寄りや子供であろうが、命乞いは一切受け入れられなかった。しかも、彼等は最初は規律ある軍隊というよりは狂暴な野獣といった有様で戦っていたが、経験を積むにつれてラケダイモン人達の中でも最も優れたものにも勝るとも劣らぬようになってきた。ことに近頃は益々そうなのだが、それはひとつには彼等の一味となったデマゴラス様のお陰であり、その死後は彼等が得たもう一人の首領のお陰である。この男は彼等の無知を引き上げ狂乱を引き下げて見事に調和のとれた中庸(1)を作り出し、勇敢に彼等を導いたので、クリトポンが囚われた時以外にも、彼等は幾つかの他の大きな戦いでも勝利を収めた。それでラケダイモンの国は彼等に使者を送り、非常に理にかなった立派な条件で和平を申し出たのだ。パツラディオスは、味方の軍勢についてはすでにあ

らましのことを心得ていたが、このように敵の軍勢についても一応の知識を得たので、カランデルのところへいって、率直に、単なる兵力によつてはクリトポンを救出できる見込みはあまりない、策を用いれば何とかできないことはないが、それには勇氣にもまして明敏な知能が必要だと語った。

そこで主立つた者達の会議が召集されたが、とうとうパツラディオスが次のような作戦を考案し、一同の賛同を得た。彼は実地の経験も幾らか積んでいたが、とりわけ史書に親しむことで軍事作戦に通じていたのだ。まず全員がアルカディアのもつとも貧しい者達の服装をし、幟は持たずに血のついたシャツを長い旗竿の先にぶらさげ、太鼓と横笛の代わりにおんぼろのバグパイプを吹き鳴らし、甲冑はできるだけうまく隠すか、少なくともそれを身に付けている者に似付かわしいように錆付いているか不格好であるように見せ掛けるかする。皆がこうするのだが、勇氣と力において選り抜きえの二百人の貴紳だけは、パツラディオス自身もその一員となるのだが、両腕を鎖で縛られて捕虜のように荷車に載せられるのである。合意に基づいて事がこのように運ばれ、彼等はクリトポンが囚われているカルダミュラの町へと進んでいった。日没の二時間前に市壁の見えるところまでやってきたが、ヘロット達はすでに彼等の軍勢を認め、警報を鳴らし始めていた。彼等は抜け目のない男を使者に立てたが、それはその抜け目のなさを田舎者の粗野なぶつきらぼうの仮面のもとに隠せるほどの、抜け目のない男であった。彼は弁論術のあらゆる花を引っこ抜いてしまうような弁論術でもって、居並ぶヘロット達にこうまくしたてた。自分等はアルカディアの田舎の者だが、自分等もあなた方と同じようにお偉方に押さえ付けられ、同じように自由を望んでいる。だから戦いに撃つて出て奴等をお大勢殺したが、他にすでに百八十から二百を捕虜として捕まえ、鎖できつく縛り上げてある。自分等が引き籠もれる堅固な場所はアルカディアにはなく、戦場で王の軍勢に対抗できるほどの勢力もまだ持ち合わせて

いないので、助けを求めてあなた方のところへやってきたのだ。自分等と同じ身分の者が日々ますますたくさん自分等のもとに馳せ参じてくれるだろうことは分かっているが、それまでに王が自分等を追跡したり、ラケダイモンの王や貴族達が事情が同じだということで自分等に襲い掛かったりすることのないように、この町に自分等を容れるだけの余地がないとしても、市壁の下に野営することはお許しいただきたい。そして万全を期すために、捕虜だけは町の中へ入れることをお認めいただきたい。この連中はあなた方の平和の保証となるような奴等なのだから。⁽²⁾

ヘロット達は、彼等の病弊がアルカディアにまで広まっていたことを喜んで、ほんのしばらく相談しただけだった。彼等と彼等の王との間に和平がありえないのなら、ギリシア全土に火を付けるのが最上の策だと思われたし、それにそんなにも多くのお偉方を手にいれられればしめたものだという貪欲な気持ちもあった。彼等はすでに身の代金の皮算用をしていたのだ。そのような性急な結論に達したのは、二つの事情が与って力があつた。一つには、彼等の首領がその時もつとも聡明な者達と一緒に町を離れ、ラケダイモンの国と和平を確立するか破るかかの談判をしていた。二つには、あまりに度重なる好運が彼等の心に傲慢な無思慮を生み出し始めていた。それゆえ人を遣つて野営の陣を見に行かせ、話す言葉で彼等が確かにアルカディアの者達だと分かると、彼等とは一度も戦争をしたことはなく、一私人の信用がそれほどの軍勢を集め得るなどとは夢にも思わなかつたので、他のすべての印が彼等が最も卑しい職業の者達だということを証言していたし、お偉方は鎖で縛られていたので、その捕虜のみならず幾人かの他の者にも町に入る許可を与え、すべての者に市壁の下に留まることを認めた。それでヘロット達は門を開け荷車を通した。中に入ると、頃を見計らつてパツラディオスが合図をした。鎖は一見いかにも強力かつ堅固に見えたが、それを着けている者

が簡単に緩められるような巧妙な仕掛けになっていたので、彼等は鎖を振り落とし、荷車に隠してあった刀を引き抜いて番兵どもに襲い掛かり、彼等を門から、さもなくば彼等の肉体から逃げ出させた。⁽³⁾そしてあつという間にアルカディアの全軍が入ってしまったので、ヘロット達は彼等を迎え撃つ態勢を整える間もなかった。

しかし、ヘロット達は危険にびくつくようなやわな連中ではなかったので、集まれるかぎりの者が市場に集まった。そしてそこから撃つて出て、アルカディア人達に手厳しい歓迎を与えようとしたのだが、パツラディオスが、ぐずぐずしている者は叱りとばし、意気盛んな者は煽り立て、何よりも自ら範を示して彼等を先導し、ヘロットの軍団奥深くなだれ込んだので、まず彼等の総体が震えよろめき始め、ついにはすべての個々の体が命の保護を足に託した。それでカラन्दルは息子がいると思う牢屋へ行くように大声で怒鳴ったが、パツラディオスは、まず通りを掃討してヘロットどもを残らず家に閉じ込め、市門の支配権を確保するように頼んだ。

しかしそれが終わらないうちにヘロット達は士気を回復し、通りの角や家の窓から矢を射たり石を投げたり様々に攻め立てて、彼等を苦しめた。首領が戻ってきたので勇気がまた湧いてきたのだ。彼は、供回りのほとんどを他の陣に差し向けていたので、僅かの者しか引き連れていなかったが、まだアルカディア人達に占領されていなかった市門から逃げ出してきた大勢の者に出くわすと、彼等の向きを変えさせ、幟を翻して、ラツパ手に高々と彼の帰還を告げさせた。そしてひとたびそれを耳にすると、散り散りになっていた他のヘロット達も、新たな断固とした決意を抱いてそちらの方に向かった。まるで彼等の首領は、そこから枝々に行き渡るように彼等の勇気が湧き出してくる、根であるかのようにであった。戦闘は激烈となり、合戦は以前

にも増して残酷で一步も後に引かぬものとなった。アルカディア人達は勝ち取ったものを失うまいと、ヘロット達は失ったものを取り戻そうと、戦った。アルカディア人達は見知らぬ土地で、自分の手以外に助けられるものはなく、ヘロット達は自分の土地で、自分の生活、妻、子供のために戦った。勝利と勇気、復讐と絶望があった。どちらの側も安全は殲滅によってしか得られなかった。

ついにアルカディア側の左翼が崩れ始めた。それを見るとパツラディオスは、精鋭の一団と共に、彼等を圧倒している敵の軍勢にすぐさま襲い掛かった。その勇猛な勢いたるやすまじく、ヘロットの首領はこの男一人で他のすべてのアルカディア人達に匹敵することを見て取った。彼の目は自らが支配されているのと同じものはすぐに見分けたのだ。彼はそれにひどく感嘆し、自身の為すことを好ましく思っているのか、自身の為すことの結果を好ましくないと思っているのか、そのどちらとも判別しかねた。しかしその般の一振りに勝負は掛かっているのだと腹を決め、他の誰とも戦う気にはなれず、彼はこの男と一戦を交えることのみを求めた。その気持ちはパツラディオスも同じだった。あの男が他のすべての手を動かす原動天だとすぐに分かったからだ。彼等の思いが一点で重なったので、同意した訳ではないが、彼等は互いの運命を試してみることであつた。そこで一方の側の一番外側のところまで行って、彼等は一騎討ちを始めた。それは音と数において戦闘に劣っている分、戦いの華々しさと、いわば快い恐ろしさにおいて、勝つてきた。勇気は技に導かれ、技は勇気で武装していた。豪胆さが知力を曇らせることも、知力が豪胆さを冷やすこともなかった。両者とも勇敢で死をもとせず、両者とも負けたことがないので自信に満ち、だが、今の気持ちで懸念し、すでに見たことで用心深くなった。足はぐらつかず、手は勤勉で、目は警戒を怠ることなく、心は決然としていた。武装していない、或いは武装が弱い箇所は、よく分かっていた。それで、その

知識に従ってそこに一撃を見舞うこともできたのであるが、そうすればお返しは攻撃と同じくらい素早いものであつたらう。しかし時にはそこに当たり、苦痛が激怒を生み、激怒が苦痛をまた生み出した。やがて双方意識朦朧となり始め、勝つて生き延びる望みもあまりなくなつて、むしろ友人達に見守られて死にたいと思ふようになっていたが、ヘロットの首領が、力からではなく憤怒から、いやむしろ憤怒に由来する力から生じた激しさでもつて、パツラディオスの頭部の側面に一撃を加えたので、彼は意識を失つてよろめいた。それで兜が落ち、彼の頭は丸裸のままだった。しかしすぐさま他のアルカディア人達が駆け付けて、その丸裸から生ずるであろう危害から彼を守つた。

しかしその必要はなかつた。彼の大敵はその好機に付け込もうとせず、跪いて、降伏の印に刀の柄頭つかがしらを差し出すことを申し出たばかりか、大声で彼に、彼の捕虜となる方が、誰か他の者の將軍となるより、自分より自由の身であると思うといったのだ。パツラディオスは立ち上がった、これはひよつとして何かの策略じゃないかと思ひ、首領のすぐ近くにいたヘロット達は、何かの計略だろうかと思ふ気持ちと裏切りを恐れる気持ちとの間で揺れ動いていたが、「おやおや、パツラディオスはダイパントスの声を忘れてしまったのか。」と首領はいつた。

その合言葉でパツラディオスは、それが彼が海で見失つた無二の親友のピュロクレスであることが分かつた。それで二人は、そのように巡り合ったことに驚嘆しながら、もつとも驚嘆よりも喜びに満ちてはいたが、退却のラツパを吹き鳴らさせた。ダイパントスは権威によつて、パツラディオスは説得によつてそうさせたのだが、それには双方ともあまり有利な立場にいなかったことが大いに助けとなつた。それというのも、ヘロットの側では、首領の振舞いを見たか聞いたかした者は皆肝を潰していたし、アルカディアの側では、老

カランデルが年不相応の大立ち回りを演じて、新たに捕虜となっていたからだ。だが実のところは、その争いを分けるのに一番貢献したのは夜であった。彼女はあの黒い腕で、憎悪に満ちた目を互いから引き離したのだ。しかしカランデルを捕らえた男は、命は助けてやろうと思っていた。もつとも首領が敵の秘密を聞き出せたら話ではあったが、首領が退却のラツパを吹き鳴らさせたとき、男は彼のところへその老貴人を連れてきたが、老人は囚われの身からの開放は、あらゆる苦痛が苦痛によって取り去られる以外、ありえないと思っていた。そのとき老人が首領のすぐ隣に目にしたのは、誰であろう息子のクリトポンであった。彼がその日アルカディア人達を相手にどれほど勇敢に戦ったのかは、一目瞭然だった。しかし首領はヘロットの主立った者達をすべて呼び集め、今後為すべきことを熟慮検討し、アルカディアの使者を謁見しようとしていた。パツラディオスの武者振りが、カランデルの彼に対する愛情と相俟って、アルカディア人達の間で彼に大きな権威を与えていたので、パツラディオスは、刀よりも話し合いによって、父と子を取り戻すようにする方が得策だと彼等を説得したのだった。首領の高潔さからみて、そのやり方できつとうまくゆくと確信できたし、昔から知っている首領の勇猛さからいって、他のどんなやり方も危険だと思ふ、と彼はいつたのだ。それで事は順序よく運ばれ、彼等はヘロット達に、自分等はただクリトポンの救出のために遠征してきたのであって、身の代金なしで父と子を釈放してもらえれば、自分等が町中まちなかに確保している足場は放棄して、これ以上何の危害も加えずに立ち去るつもりだ、と申し立てた。ヘロット達はその条件を聞き理解したとき、ダイパントスはすぐにそれを受け入れるよう彼等を説得した。「というのもまず第一に、」彼はいつた。「戦鬪が我々自身の町で行われている以上、もし君等が負けければ、この世で君等にとって大切なあらゆるものを失うことになる。君等が勝ったとしても、それは血みどろの勝利で何の利益もなく、我々のうちに潜んでい

るあの卑しい復讐心を喜ばせるだけだということになりかねない。その上、そうなればアルカディアは立腹して我々に攻撃を仕掛けてくるであろうが、我々が今この者達に親切にしてやれば、アルカディアも少しは友好的になるかもしれない。最後に、そしてこれが一番大事なことなのだが、我々は今ラコニアの王ならびに貴族達との間に完全な和平を確立したが、彼等にこの争いに乗じてアルカディアを味方に引き込み、すでに締結済みの有利な合意を破棄しようなどと思わせてはならないのだ。つまり、好都合な成り行きの利益と不都合な成り行きの損害とを天秤にかけてみれば、どう考えても、これがもつとも安全で名誉あるやり方だと分かるであろう。」

ヘロット達は彼の権威に心動かされ、彼の道理に説得されて、それに同意した。それを見てパツラディオスは、夜が互いの自信のなさで彼等を平穩に保っているあいだに、アルカディア人達が囚人を伴って直ちに町を出るように、そして夜が明けないうちに彼等が十分に町を離れ、視線や言葉や誰かの喧嘩やらが、つい今し方まで敵同士であった者達の間、ややもすれば引き起こしかねない不測の事態を避けるように手筈を整えた。双方で話が纏まり決着が付くと、カランデルとクリトポンはお互いを認めて限りない喜びに浸っていたが、ダイパントスのところへやってきて、彼の手と足に口付けをした。クリトポンが父親に語ったところによると、ダイパントスは、自らに危険が及ぶかもしれないのに、クリトポンをヘロットの狂気の憎悪から守ってくれ、その日も和平の決着を付けに出掛けるに当たって、留守の間に危害を蒙るといけないので彼を供回りに加え、ヘロットの側に立つという約束で甲冑も与えてくれた。そしてクリトポンは父親が相手とは知らず、今日の戦いでその約束を果たしたのだった。「しかし、」クリトポンはいった。「ここにおられるのは、父親のように私を新たに生んで下さり、すでに私を捕らえていた多くの死から、神様のように私を救

「つて下さったお方なのです。」カランデルは嬉し涙に咽びながらそのことと自分を救ってくれたことに感謝し、まことに見上げた所業だと褒めちぎった。しかしダイパントスは、善行を感謝されるためではなくそれ自体のために愛していたので、そのような仰々しいことはそれで打ち切つて、一体どうしてパツラディオスが——彼はムシドロスのことをそう呼んだのだ——アルカディア側に加わることになったのか、彼の現在の立場はどうか、教えてほしいと頼んだ。カランデルがその間の事情を手短に話すと、彼はクリトポンを通じてパツラディオスに伝言を送り、今は僕のところへ来てはいけない、僕はそれ程確実にヘロットの心を支配しているとは思えないので、あえて君を彼等の手の中に入れるようなことはできないのだ、何しろ君は敵意に燃えている知り合いの間で有名なんだからね、ともかくカランデル殿と一緒に帰つてくれ、僕も二三日中にヘロットとは縁を切つてそちらへ行くから、といつてやった。カランデルはその約束を聞いて、またまた彼の手口付けしないではいられなかった。そして、一度でもあなた様をお迎えできたら、私は私の家を神々のお社よりも祝福されたところと思えますでしょう、と断言した。ダイパントスはアルガロスのことと許しを乞い、命に代えてもアルガロス殿は連れて行く、ときっぱりといい、その時までは嚴重に牢に閉じ込めておくが、それは彼の安全のためなのだ、ヘロットは彼のことできりたっている、そうでもしなければ生きておれなかつたらう、といった。それでダイパントスは暇乞いをして、カランデルとクリトポンとパツラディオスと他のアルカディアの者達は、もう絶対にどんなことであれヘロットを悩ませるようなことはしないと誓つて、死体と負傷者を担いで、直ちに町から出ていった。そして夜明けまでにすでにアルカディアの領内に入っていた。

第七章

ラケダイモン人とヘロットの和平の条項。ダイパントスがヘロットのもとを去り、アルガロスとともにカラन्दル¹の屋敷に向かうこと。見知らぬ婦人のアルガロスへの申し出。彼の拒絶と婦人の正体。

他方の側のヘロット達は門を閉ざして、死者を埋葬し、傷の手当てをし、疲れた体を休めることに掛かった。やがて次の日が心地好い陽光を彼等に与えると、ダイパントスは全員を呼び集め、このように話し掛けた。「我々はまず、」彼はいった。「期待するいわれも想像する理由もないほどに、我々がすでに呑み込まれていたこの危険の淵から我々を救い出して下さった神々に、感謝しなくてはならない。なぜならば、神々がまさにあののように私の帰還を導いては下さらず、すべてが失われていたとすれば、奪われて確保しておくことができなかつたものを取り戻すには、手遅れだったのであろう。そして、もしたまたま私が彼等の武将の一人と知り合いでなかつたならば、そしてその武将の尽力で休戦が開始されたのだから、君達にも容易に分かるだろうように、アルカディアからの、あるいは、この好機から知恵の実を生じさせているであろうこの国の貴族達からの援軍によつて、我々は力を滅亡に、誇りを後悔と悲しみに変えさせられていたであろうことは、火を見るより明らかだ。しかし今起こつた嵐は静まつた。クリトポンを、その年令やいさかいの程度からみて、とても正当とはいえないほど酷に拘禁したことで犯した過ちは、今後はもつと節度をもつて事を運ぶべきだという教訓を、高い代償で教えてくれた。

さて、ラケダイモンの王達¹ならびに貴族達と君達との間に結ばれた取り決めについて、君達に報告しなく

てはならない。それは、君達も認めたであろうことに關しても、認められたことの保証に關しても、あらゆる点で君達が望んでいた通りのものだ。君達が現在保有している町や砦は、君達が国の法律を変えない限り、そしてラコニアの他の者達が納めている税金を君達も納める限り、今後も君達のもので、駐屯隊を置いてもよいし置かなくてもよい。君達は布告によって自由民となった。それゆえ行政官の選挙に際しては、選挙権も被選挙権もある。ヘロットとラケダイモン人の名の区別は完全になくなり、すべて差別なくラコニアの名と特権を享受できる。君達の子供は彼等の子供と一緒にスパルタの教育法⁽²⁾で育てられる。君達が立派な国民となるならば、これからは君達は同胞であつて、もはや奴隷ではないのだ。

こういつた諸条件は争いよりもむしろ保証を伴っている。これはそれらによつて作られる和平ではなく、君達がそれらによつて作られる和平だからだ。最後に、これまでのすべてのことは不問にするという布告が出されたが、君達のような勇敢な者が彼等の陣営に加つたので、彼等が喜んでいふことを、このことは示しているのだ。それゆえ、戦争の原因は無くなつたのだから、君達は平和を心掛けねばならない。そして、これまでは抑圧者として彼等を憎んでいたのだが、これからは兄弟として愛さねばならない。彼等の国を大切にしないではいけない。君達の国なのだから。そして有徳の行いによつて、子々孫々が君達が和解したことを悔やまないように努めなくてはならない。しかし彼等はあるひとつの条項にだけは固執した。私はとうとう君達の使者とともに同意したのだが、それは、私はもうこれ以上にぐずぐず留まっていたはならない、というものである。彼等はおそらく私の氣質を誤解して、私の若さゆえに、私を危険な扇動者だと思つたのであろう。それともそれはアミクラス王の差し金で、私が不運にも王の甥のエウリレオンを殺してしまつたせいであつたのかもしれない。しかしそれがどうであれ、私は承知したのだ。」「私達は承知しま

せん。」集まつた者達のほとんどすべてが絶叫した。そして、彼等を勝利に導いてくれた人を失うよりも、最悪の結果も甘んじて忍ぼうと口々に話し合った。しかし彼は、全部の者に語り掛けるのみならず、もつとも信用のある者達と個別に話し合つて、空しい情に流されるよりも、そのような好機を掴むことの方がどれほど大切であるかを、彼等に充分に悟らせた。しかしそれでもまだ説得できなかったので、とうとう彼は、もしいつかラケダイモン人達がこの条約を破るようなことがあれば、自分は戻ってきて首領になると、皆の前で誓つた。

それで数日後、ヘロット達をきちんと纏め上げてから、彼は彼等に別れを告げた。彼等の目は涙で、彼の口は彼が歩んだところに口付けすることで、彼にさようならをいった。そしてその後彼等は半神として彼のために社を幾つか建てた。年令を遙かに越える英知を備えていること、あれほどにも恐ろしい猛々しさが、あんなにも秀でた美しさから生じてくることは、人間の程度を越えていると彼等は思ったのだ。しかしダイパントスは自分に免じてアルガロスに無罪放免の許しを与えてやってほしいと頼み、ヘロットに対して決して武器は取らないと誓わせて、彼も釈放した。そして自分の宝石のうち幾つかの特に大切なものだけを持って、アルガロスと二人だけで立ち去ろうと思つたのだが——アルガロスの顔は、パルテニアの行方が分からない以上、自分が開放されたとは思つていないことをよく示していた——全員がどうしてもアルカデアまで彼を護衛するといつてきかなかつた。国境で彼が立ち去るのを彼等がまた嘆くのをそのままにして、彼は道を尋ねて人によく知られたカランデルの屋敷にやってきた。そこで彼は、カランデルの愛情溢れる喜びと、パツラディオスの喜び溢れる愛情と、アルガロスの悲しそうだが謙虚な物腰と——ダイパントスもパツラディオスもとりわけ彼を見守つた——クリトポンの感謝の念に満ちた甲斐甲斐しさと、そしてすべ

ての者の敬意に満ちた驚嘆の念とで迎えられた。というのも、人間の程度を越える偉業を成し遂げたのに、まだ顔には髭がなくて一人前の男とはいい難く、また、最も恐ろしい死の顔を幾度も見ても動じなかったのに、まるで人に見られるのを恐れているかのように、恥ずかしそうにほとんど顔を赤らめて、いかにも控え目な物腰で人に接し、まるで自然が仕事の手順を間違えて、軍神マルスの心臓をキューピッドの体に入れてしまったかのようなのを、今日の当たりにして、ダイパントスを見た者はすべて、そして見ることでできた者はすべて見たのだが、目を心への急使に仕立てて、人間に見出さる極致をここで見た、と報告させた。同様の驚嘆の念をパツラディオスも以前に掻き立てたのだが、ダイパントスの方が年も若く後からきたので、潤った³気紛れな目の印象には有利だったのである。しかし、気の毒なアルガロスは別にして、あらゆる人がダイパントスに対して、目の喜びに心の気持ちを代弁させている間に、運命は、多分その饗宴に招かれていて、大いにふざけて座を楽しませてやろうと思っていたのだが、一同の間に愉快な事件を持ち込んで、それは次のような次第であった。彼等がちょうど食事を終えたとき、カランデルのところ³に使者が来て、コリントスの女王、美しいヘレン様の近親に当たられる、あるお若い貴婦人が当地に来ておられて、カランデル様のお屋敷に逗留させていただきたいと申しておられる、と伝えたのだった。カランデルは、そのような機会が与えられたことをとても喜んで、出ていった。他のすべてのやんごとなき客達も後に続いたが、アルガロスだけは別で、自室に閉じ籠もり、一人でパルテニアを捜しに出掛けられるよう、早くこの一団が解散になればいいのに、と思っていた。しかし彼等がこの婦人に会ったとき、カランデルはすぐにこれは姪のパルテニアだと思った。それで彼は親しげに彼女に話し掛けようとしたが、彼女が真面目な敬意に溢れた態度で、あなた様は誤解していらっしやいますといったので、彼は少々恥じ入り、余りによく似ていらっしや

るものですから、もつとも、あなた様のお顔色の方がより純白でお美しく思えますが、と行って弁解した。それに対して婦人は、それも仕方ございませんわ、これまでにも幾度となく取り違えられておりますものと答えた。しかし婦人は屋敷の中へ案内されると、腰を降ろす間もなく、すぐに、皆様方の前でアルガロス様とお話がとうございます、アルガロス様がこのお屋敷においでだということは聞いております、といった。アルガロスはたちまちやってきて、カラन्दルと同じことを同様^{たがひ}にたちまち考えたが、喜びはすぐに悲しみに変わった。しかし婦人は名前と身分を告げて彼等の思いを押し留めると、アルガロスにこのように話し掛けた。「アルガロス様。」婦人はいった。「わたくしは最近、コリントスの女王のヘレン様があるご用件で宮廷をお離れになりましたとき、宮廷に残って、女王様ご不在の間^{かん}その切り盛りをしていたのですが、その折にパルテニア様がわたくしのところにお見えになったのです。ところがお顔が見るも無残に崩れていまして、これほど醜悪なものが他にギリシアで見られようとも思えません。わたくしはと申しますと、何度もの熱の籠もった誓い、幾つかの明白な証拠によって、わたくしがこの方はパルテニア様ではないかと思うようになりましたのは、幾日も経ってからのことでした。しかしとうとう間違はなくパルテニア様だと分かって、その不運を嘆きに嘆いたのですが、皆様方と同じように、わたくしたちは本当に瓜二つだと、いつもどなたもおっしゃっていましたので、わたくしの嘆きはそれだけ大きかったです。わたくしはできる限りのお世話をして差し上げ、いわれのない成り行きの悲劇的な物語の一部始終を聞かせていただきました。それと同時に、アルガロス様、あなた様のこの上なく尊い変わらぬ誠のことも聞きました。それを愛さぬ者は誰であれ、自分が美德を憎んでおり、人間の社会に生きるに価しないことを示しているのです。しかし外をいくら大事にして差し上げても、中の心の傷を癒して差し上げることにはなりませんでした。数日後パルテニ

ア様はお亡くなりになったのです。しかし、パルテニア様はお亡くなりになる前、わたくしが夫としてあなた様以外のことは考えないように、あなた様がこの世で愛するに価するただひとりのお方だから、と熱心にお望みになり説得されました。それとともに、パルテニア様はわたくしにこの指輪を下さって、あなた様にお渡しするよう申されました。そしてあなた様が、パルテニア様に対するあなたの愛の愛情をわたくしの方へ向けることをお望みになり、愛の権威によってお命じになったのです。あなた様とわたくしとが結ばれているのを見ることほど、あの方の魂にとって嬉しいことはない、あなた様に対して保証されました。このようなことをするのは、恐らくわたくしの身分や女の身にはふさわしくないでしょうけれども、女というものは望まれるのを待つべきものでしょうから、それでも、並み外れた値打ちは並外れたやり方を求めるのです。それでわたくしは、あなた様の立派さの上に築かれた忠実な愛を胸に、わたくしを差し上げますと申し出て、あなた様がその申し出を受け入れて下さることを懇願するために、こちらに参ったのでございます。もしここにおいでの高貴な方々が、これは狂気の極みだ、とおっしゃるならば、同時に、これは愛の極みだ、と聞いていただきとうございます。」こういうと婦人は口を閉じ、真剣にアルガロスの返答を待ち受けた。アルガロスは、まず心の奥底からの嘆息を洩らして、せいっぱいの弔辞をパルテニアに捧げたあと、こう答えた。「ご婦人よ。」彼はいった。「この希有の尊い丁寧なお申し出を、私は口ではいえぬほどかたじけなく存じておりますが、あなたがパルテニア様にお示しになったと今うかがいましたご親切を、とりわけかたじけなく存じております。」そういうと彼の目から涙が流れ落ちたが、彼は続けた。「私は悲惨の見世物像にふさわしい不幸な男ではありませんが、それでも誠心誠意あなたにお仕えますので、どうぞ、命ある限り必ずご用を務める奴隷をお買いになったのだと、お考えになって下さい。お申し出のこの重大な問題は、それ

が私にとってどれほどの幸福となるであろうか、分からないほど私は盲目ではありません。しかし、秀でたご婦人よ、ご承知置きいただきたいのですが、もし私の心が私のものであって、自由に差し上げられるものなら、どなたよりも先にあなたが手に入れられたことでしょう。ですがそれは、亡くなられたとはいえ、パルテニア様のものなのです。私は愛の問題はすべてパルテニア様で始めましたので、パルテニア様で終えるつもりです。パルテニア様がこの世を去られた以上、私もいつまでもぐずぐずと後に残っているとも思えません。もし私があの方の美しさだけを愛していたのであれば、同じ美しさをお持ちのあなたを愛していたことでしょう。しかし私が愛していたのは、そして今も愛しているのは、パルテニア様ご自身なのです。どのような類似もその愛を生じさせることはできませんし、どのような命令も消滅させることはできませんし、どのような醜さも汚すことはできませんし、どのような死も終わらせることはできないのです。「では、わたくしは」婦人はいった。「拒絶されるという屈辱を受けるのですか。」「尊いご婦人よ。」彼はいった。「どうかそのようなきつい言葉はお使いにならないで下さい。あなたの卓越した価値は私の値打ちを遙に越えていることを、あなたはご存じなのですから。私が拒絶しているのは唯一仕合わせです。私が望むことができず、今も望むことができる唯一の仕合わせを、私は拒絶されているのですから。」

アルガロスがこういったかいわないうちに、婦人は彼のところに駆け寄り、しっかりと抱き締めた。「ああ、アルガロス様。」婦人はいった。「さあ、あなたのパルテニアをお取り下さい。」それは本当にパルテニアだったのだ。しかし悲しみが彼に軽率に信じることを禁じたので、彼女は真実を仔細に余すところなく語った。どこか淋しいところで死のうと思って、ひとり家を出て、とあるところで嘆いていると、同様に惨めな気持ちを感じていたコリントスの女王ヘレンも、その美しい場所をひとり歩いて歩いていたが、彼女の声を

聞き付け、一部始終を聞いてしまうまではそこを離れなかった。高貴な女王はそれをひどく憐れんで、彼女を自分の医者のところに行ったが、この医者は世界で最も卓越した腕を持っており、女王は彼なら彼女を助けられるかもしれないと思ったからだ。それは皆が見ての通りになされ、彼女は女王の幾人かのお付を連れて、アルガロスが誠実なパルテニアをすぐに忘れてしまうか否かを、このように試してみようと思ったのだ。彼女の話はそれまで秘密を守っていたコリントスの貴族達によつて確認され、アルガロスは一万年以上の命よりも望んでいたことを、説得されて簡単に承諾した。カランデルは婚礼の式はどうしても彼の屋敷で挙げてほしいといったが、それは主として、大切な客人をもっと長く引き留めておくためだった。彼は元來客をもてなすのが好きだったが、それに加えて、愛と献身の情とで彼等に引き付けられたのだ。それゆえ、彼の知恵が考案しうる、そして彼の力が提供しうるどんな奉仕も、彼はおろそかにはしなかった。

第八章

まずムシドロスの、続いてピュロクレスの、難破から再会までの出来事。アルガロスとパルテニアの婚礼。

しかしカランデルは、二人の友人同士を放っておくことほど、どうやっても彼等を喜ばせることはできないと悟った。彼等は例の絵の掛かっている軽食堂に引き籠もり、そこでパツラデイオスは友にこれまでのことを話して聞かせた。彼等が二人とも燃上する船を捨て、そして岸までよりよく支えてくれるように、どちらも何かの上に乗ったあと、どういふ訳だかよく分からないが、戦闘と突然の冷たさの中で奮闘しすぎ

たためか、それとも塩辛い水を飲み過ぎたためか、彼は意識を失った。しかし死にかけている人間が本能的にするように、乗っかっていた箱を必死に擲んでいたのだ。彼は砂浜に打ち上げられた。そこで二人の羊飼いに助けられて、再び息を吹き返し、もう命はないものと絶望していたのに、溺れ死にすることは免れた。ピュロクレスを漁船に引き揚げそなたあと、彼は羊飼いや達に勧められて、この貴人の屋敷にやってきた。ここで重い病に倒れ、彼は健康の回復を図るのやむなきに至ったが、それはひとえに、それだけ早くピュロクレスの救出に出掛けられるようにするためだった。カラन्दルもそのために、メッセニアの幾人かの友人に頼んで、すでに船を一隻か二隻海に出しているが、クリトポンが捕らえられるというこの思いがけない出来事のために、彼等の再会という嬉しいことが起こったのだ。それからムシドロスは、彼に対するカラन्दルの高貴な歓待と行き届いた世話について話し、そこに掛かっている絵をきっかけに、友人の語り口の率直さで、一語一語できる限り正確に、アルカディアの不思議な物語についてカラन्दルが話してくれたことを、付随するすべての詳細な話とともに、ピュロクレスに語った。それを聞いてピュロクレスは大層面白がり、その大部分をどうしてももう一度話せといってきたが、カラन्दル自身が色々の質問に答えるまで満足しなかった。

しかしピュロクレスはまず、ムシドロスの求めに応じて、アルカディアの不思議な物語のことを心は色々と思ひ巡らしていたので、ごく簡単にはあつたが、どのような一連の出来事によつて、彼が再会というお互いの仕合わせを獲得することになったのかを、話して聞かせた。「従兄よ。」彼はいった。「僕達が服を脱ぎ捨てて海に飛び込み、岸に向かつて少し泳ぎ出したとき、僕は幾つか傷を負っていたので、到底陸^{おか}まで辿り着けないと分かつたのだ。それでまた船のマストのところへ戻つたのだが——君が僕を見付けたところ

だ——もしも君が生きて岸に着けば、きつと僕を探しに来てくれると信じていたし、もしも君が死んだら、僕が生きていようが死のうがどうでもよいのと同様、死に場所はそこでもどこでもよい、と思ったのだ。そこで僕はある索具の間に僕の刀を見付けたんだが、白状すると、もしも死ぬのなら、それを手に持った姿で発見されたいと思った。その上刀を頭の回りで振り回したが、船乗り達の目に付きやすくなるためだった。そこで君が僕を助けそなたあと、僕は海賊に引き揚げられたが、連中は僕を捕虜として甲板の下に閉じ込め、すぐに別の船に襲い掛かった。長い間戦っていたが、連中はとうとう全員を切り殺してしまつた。連中の中で、大層勇敢に戦つたある若者が褒めそやされているのを僕は耳にしたが、僕はそれはきつと君のことだと思つたのだ。愛は苦労性だし、不運は心配に隷属しているからね。それで君はもう死んだものと思つて、その時から君を見た時まで、実のところ、僕は天晴な最期しか求めていなかった。そしてそれが恐らく僕をそうでなかつた場合よりも豪胆にしたのだ。試練はその後二日もしないうちにやつてきた。ラケダイモンの王達は幾隻かガレー船を出して、甥のひとりに指揮をさせ、海賊を掃討していたが、僕等は彼等に出くわしたのだ。僕等の船長は部下の数が足りなかつたので、やむをえず、よく戦つたら自由にしてやるという約束で、幾人かの捕虜に武器を持たせた。僕もその一人だつた。そして敵の旗艦に乗り移つて、好運にも王の甥のエウリレオンを殺した。しかし結局は彼等の勝ちで、僕等は皆捕虜となつた。僕は自分はどうなろうとあまり気にしていなかつたが、ただ君と僕との堅い約束に従つて、ダイパントスの名だけははずつと使つていた。僕はエウリレオンを殺したことで特に憎まれ、タイナロスの牢に入れられていたが、その町の平民がヘロットと謀つて、夜彼等のために門を開けたのだ。彼等はなだれ込んで、身分の高い豊かな人達を皆殺しにしたあと、約束通り、すべての牢をぶち破り、僕も開放してくれた。僕は感謝の念に動かされ、

命を軽んじる気持ちに励まされて、数日間幾つかの戦闘で暴れ回ったので、彼等は野蛮にも僕のことを想像を絶した驚異と考え、その上僕がラケダイモンの王に憎まれていると聞いて、それだけ益々僕を信用した。君も知つての通り彼等の首領は気高いアルガロスに殺されたのだが、僕を大変愛してくれていたもので、彼等に色々と話して、僕の信用を高めてくれた。それで、主立った者達の間には誰がその地位に就くべきか危険な対抗意識が芽生えてくるのを避けるために、競争者よりも余所者を頭かしらに戴くことを望んでいたもので、彼等は僕を選んだ。僕はそんな地位など、少しも誇りに思わなかったがね。そして、最初海賊に、次にラケダイモン人達に奪われた、僕の持ち物を返してくれた。彼等が町を掠奪したときに分捕つたのだ。町での首尾は上々で、多くの勝利を収め、彼等に異存のあるはずもない和平を結んでやった。君がクリトポンを救い出したあの日だ。僕は苦心惨憺して彼の命を守ってやったのだよ。和平の条件としてラケダイモンのアミクラス王は、僕が町から追放され、僕が就いていた高い地位を奪われることに固執した。僕は君のために敢えてそれを呑んだ。君がどれほど僕のお陰を蒙っているか分かるだろ。君が死んでいないかもしれないという新たな希望が湧いてきて、それで世界中を旅して、君を探そうと思つたのだ。それで今ここに、愛しいムシドロスよ、君は僕とともにいるのだ。」彼が話し終えると、彼等はお互いに抱擁し口付けをして、カランデルを呼んだ。ダイパントスは、カランデルが以前にパツラディオスに語つた話をすべて聞かせて欲しい、ピラナックスの手紙も見せて欲しいと、彼に頼んだ。その手紙を彼は読み、よく心に刻み付けた。

しかし、その後数日のうちにアルガロスと美しいパルテニアの婚礼が行われることになつていたので、ダイパントスとパツラディオスは宝石を幾つか売つて、彼等を愛してくれているこの家の主あるじに敬意を表するために、非常に美しい衣裳を用意した。主は、婚礼のためのみならず彼等のためにも、あらゆるものをこの

上なく豪華絢爛に調えた。しかし、マンティネイアのすべての乙女達の真珠であるパルテニアほどには、どれほどの物惜しみしない出費も豊かにせず、どれほどの華やかな飾り付けも美しくせず、どれほどの凝った企ても楽しませなかった。パルテニアが婚礼の式を挙げるため寺院にいったとき、彼女の目自体が寺院であつて、そこで愛と美が婚礼の式を挙げたように思われた。唇は慎ましい沈黙で堅く閉ざされていたが、生まれつき美しくふっくらとしていて、客を差し招いて見詰めさせているように思われた。頬は赤く染まり、話し掛けられると微かにほほえんで、微かな風の息吹に花びらが揺れる薔薇のようであつた。髪の毛は背に長く垂らしてあつたが、前衛が敗北してもそれが征服するだろう、といった風情であつた。ダイパントスは彼女を眺めていたが、「ああ、ジュピターよ。」とパツラディオスに話し掛けた。「美がアルカディアにのみ限られているのは、一体どうしてなのか。」しかしパツラディオスは彼のいったことには余り注意を払わなかつた。数日間婚礼の祝宴が続き、人の想像力に喜びをもたらすあらゆる趣向に事欠かなかつた。

注

第一卷第五章

- (1) スパルタのこと。ラコニアの首都。以下、ラケダイモンとラコニアはあまり分けて考えなくてもよい。
- (2) 「苦しむ者」の意。
- (3) 「乙女」の意。
- (4) 架空の人物。スパルタ王メネラオスの妻でトロイ戦争の原因となつたヘレン（ヘレネ）のことではない。し

かしかもちろんヘレンであるからには、同じように絶世の美女。

(5) 「民衆の扇動者」の意。

(6) ヘラクレスはジュノーの夫ジュピターとアルクメネの子。嫉妬したジュノーは、ヘラクレスに十二の難行を課した。

第一卷第六章

(1) 古代ギリシア以来、中庸は特に大切な美德であった。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』にも説かれているし、シドニーの同時代人スペンサーの『妖精の女王』では、信仰の次に重要な徳となっている。黄金の中庸といわれた。

(2) 身分の高い者を捕虜としており、敵は攻めてこないから。

(3) 死とは魂が肉体から抜け出すことであった。

(4) コペルニクスの地動説が受け入れられるまで西欧世界を支配していたプトレマイオスの宇宙像にある、九層の天球の一番外側のものが原動天であるが、その英語の訳語「first mover」（最初に動かす者、原動力）を面白く使ったもの。

第一卷第七章

(1) ラケダイモンには二人の王がいたことは、アリストテレス『政治学』第五卷第九章、パウサニアス『ギリシヤ地誌』第三卷第一章に見える（Sir Philip Sidney, *The Countess of Pembroke's Arcadia* (The New Arcadia), ed. Victor Skretkiewicz (Oxford, 1987) の注による）。ちなみに、訳者の手元にあるパウサニアス

の英訳本で当該箇所を参照すると、「アリストデモスが双子を儲けたので、ラケダイモンには二つの王家があった。そしてこれはデルポイの神託が告げた通りであったといわれている。」とある。

(2) いわゆるスパルタ式教育法であるが、教育を「立法者の事業の中で最も大事な最も立派なものと考へてゐた」スパルタの立法者リュクルゴスが確立したものと考えられていた。リュクルゴスについては『プルターク英雄伝』に記述があるが、プルターク自身「その家柄もその旅行もその最後も、殊にその法律や政治に関する業績も傳へがまちまちになつてゐるし、この人の生れた時代については最も一致を缺いてゐる。」といつてゐるように史実がはつきりとせず、現在では伝説上の人物と考えられている。右に引用した訳は岩波文庫版の河野與一のもの。リュクルゴスの章は第一巻にある。

(3) 原語は 'moist'。当時四体液の混合の具合で人の性格は決まると考えられていたが、「潤つた」はその体液 (humour) に言及しているのであり、「変わりやすい、むら気な」という意味だと、スクレットコウィッツは注釈しているが、どうだろうか。